

榎村

徹

聞き手◎西村幸夫(東京大学教授) 編集協力◎塚正浩(町並み再生委員会)



榎村 徹(ならむら・とおる)さん
1947年岡山県倉敷市生まれ。倉敷建築工房・榎村徹設計室を主宰。古民家再生工房の一人。海外視察は40数カ国におよび現在は毎年中国奥地を訪れている。

古い民家をモダンリビングに再生する

倉敷には、現在のように町家や古民家がブームになる以前から、その再生に取組んできた男がいた。それは保存だけでなく、クライアントに評価されるモダンリビングな再生。今、男の周りに若い人たちが集まり、新しいまちづくり活動が生まれつつある。

●倉敷での古民家再生の始まり
——今日のゲストは、倉敷の榎村徹さんです。民家の再生はこのところ、各地で盛んになってきて、京都や金沢でも調査が行われていますが、榎村さん達のグループは、こんなにブームになる前から、古民家再生工房を立ち上げて、既に全国で200棟を超える古民家の再生をやられている。そして、榎村さん自身も倉敷をベースに70棟を超える古民家再生をやられています。この古民家再生工房は、日本建築学会の業績賞を受けられていて、活動は既に世の中で高く評価されています。

●今日ご紹介するのは、単に復元再生するのではなくて、いろんな形での再生。モダンリビングですね。魅力的な、あっと驚くような再生のやり方をご紹介頂けると幸いです。その意味では、古民家再生の有力な方法を提起して頂けるんじゃないかと思っています。
榎村 ●我々が再生を始めたのは20年ほど前になります。パブルの真つ只中で、そういうことをやっている、「あなた達は仕事が無いのか」と言われながらやりくりしてきたわけですが、今、評価をしていただけたらいいんですけど、なぜかという単純な理由で、時間が無いし、関わっている余裕もない。我々はものを作る人間ですので、作る方へ徹していかないとやっていけません。

●まちづくりの話聞いてみると、大体が総論賛成、各論反対で、まともな話を聞いたことがない。私自身は、いくら小さいものを頼まれても、経済的なことも考えて、きちっとした形で最善の設計をします。そして、少しでも周りに良い影響を与えるものとして仕上げていく。それを10年、20年繰り返していくことによって、まちの中にそんな建物が点在していく。結果として町並みになっていく。町並みとかまちづくりというのは、1年とか2年でできるものでもないですし、きちっとしたことを繰り返していくということが必要ではないかと思うわけです。

●古民家再生の試み
アイビースクエアは、いわゆる倉敷紡績発祥の地で、我々が子どもの頃には閉鎖されて、幽霊が出るから近づくなと言われていた工場だったんですけど、今、評価をしていただけたらいいんですけど、なぜかという単純な理由で、時間が無いし、関わっている余裕もない。我々はものを作る人間ですので、作る方へ徹していかないとやっていけません。

●森田酒造という造り酒屋の一隅に、建物はたいしたものではないんですが、大正期のファサード建築が残っていました。瓶詰工場だったんですが、我々はこれを店舗に再生したんです。ファサードは、そのまま残したんですが、浦辺先生をはじめ市の担当者からは、「前のファサードを取るとちゃんと昔のものが出てくるだろうから、そういうふうに変えろ」と言われたんです。

しかし、我々は、「このファサードはきちんと街に馴染んでるんだからそのまま残して、中を再生するんだ」ということで、他の業界のメンバーも入れて2年間くらいプロジェクト

造っていくべきであろうと考え、色々な所を見て回って、調査したり勉強したりしました。しかし、ほとんど古民家は壊されていて、オーナーの方に聞いてみると、「先祖代々のものなので残したいが、誰も相手してくれない。地域の大工や工務店に相談すると建替の2倍も3倍も金がかかると言われた」と。我々が地域でやっている以上、それに応えていく義務があるのではないかと仲間と話をしまして、民家の再生に手を染めていった訳です。

●古民家再生の方法論

我々がやってきた方法論というのは、保存を目的としたものやアカデミックな観点ではなく、どちらかと言うと、設計者として設計のおもしろさでそれを考えてきました。例えば、ヨーロッパでは古い石の建物がたくさんありますけども、それを再生して、モダンな家具のショールームや事務所、レストランになっていくものがあります。それを見て、半分あこがれる部分があつて、こういうことが日本でもできないかというところから入りました。ですから、民家再生をする際の我々の思考は「モダン」。現代的で魅力的な空間として再生をしていくというのが大前提となっております。

●結果としての町並み保存

私自身はまちづくりとか、そういうものから少しスタンスを置いていて、あまり関わりたくないと思っ

クトに取り組みました。とにかく美観地区で土産物屋でない小売店でちゃんと成り立たせてやろうという意気込みで、全国から集めたおいしいものでブティックを作ろうと企画して再生したものです。

また、我々が古民家を再生すると、雑誌に載ったりしますから、東京からいろんなデパートの企画の人が見に来ました。その方々は、「コンセプトはきちっとしているし、内容も良い。だけでも、これは東京ではできません」と言っています。こんなに面積をとって、単価の安い物を売っていたのでは成り立たないというんですね。でも、土地単価の安いところで自分の持ち味を出せば、東京ではできないことをやれる。これが地方の特色であって、地方だからできることは山ほどある。その辺を探しながら再生も絡めてやっていくというのが我々のスタンスです。

●現代的空間への再生

私が20年ぐらい関わり続けている老舗の旅館があるのですが、この建物は江戸時代のものでですけど、決して

家を再生して、一軒ずつ地主にあたりながら、人を入れていこうということを始めまして、私も協力していません。祭りも再生し、屏風の良いものを出して、お披露目しています。また、私自身が、ボランティアで「倉敷再生塾」を作りました。若い人を募集して、20人ぐらい集まりました。そこで、再生とか、町をどうしていこうかという勉強を2年間ぐらいかけてやろうとしています。その塾で地代だけ出して、後は好きにして良いという空き家を探しました。倒れそうな10坪の家ですが、これを再生して、フリーで泊れる宿泊施設に変えようとしています。これを実際解体し再生していくのを、職人さんの指導を受けて、みんなの手でやろうということで対応しています。壊してしまうと、もう法的に建たないというものですけど、ひよろひよろの構造材であっても、何か上手い活かし方をすることによって、それなりの時間経過があるものから、新築で建てるよりは、魅力的なものとして甦ってくるし、周りの景観も崩さないし、美しくおさまっ

て良いものではなくて、傾いていた家です。昔から旅館をされてきたんです。旦那さんが亡くなられても辞めようというところだったんです。そこで森田酒造のご亭主と一緒に女将さんを元気づけて説得し、経営相談までやって再生をして、今では倉敷の老舗旅館、高級割烹旅館として甦った例です。ここは、20年ぐら前に一回改装して、それから順番に改装をしながら未だにやっています。その女将さんのお姉さんが倉敷に帰ってこられまして住まわれるために、美観地区内の町家を再生しました。古い町並みの中で現代生活を営むための再生事例として評価され、2002年に日本建築家協会環境建築賞・最優秀賞をいただきました。

次に、江戸時代の染め物屋の作業納屋が残っていたのですが、これを再生して私の事務所としたものです。小窓を入れたりしましたが、以前のものよりシックで良いものを提供しようという理念のもと再生しました。1階はサロンとして、2階は床に補強をして設計事務所にしていくのではないかなと考えています。

私自身は、修景で全部綺麗になってしまふことには、若干抵抗もあるし、保存といっても難しいというか、何か嫌味な形になってくると考えています。自然にそこに帰着していく方法論をつくる。要するに、自然にものがおさまっていくとか、そういう方法論を上手に作為的に作れたらいいなと。それが自然に受け入れられる方法で、魅力的なものに変わっていくということを常々思いながら、一般に通じることを目標に、毎日考えてやっています。今は市も協力的で積極的になってくれています。倉敷は、これまでまちづくりとかいう話はほとんどなかったまちなんです。恵まれていたからだろうと思えますけど、その辺りの可能性にかけて、これからも活動していこうと思っています。

●魅力的な空間を求めて

——植村さんがやられている民家再生も、文化財の保存を否定されている訳ではなくて、選択肢の一つとして、二

ます。

一方、伝建地区外ですが、15年か20年ほど空家になっていたものがありました。母屋にはブルーシートをかけてあって、もう半年遅かったら崩れ落ちていたと思うんですけど、屋根に穴が空いて、腐っていた部分もありました。これを直して、和食のレストランとして再生しています。内部はイタリアンのテラコッタを張って、和洋風ごちゃ混ぜみたいなもんですけど、質感であるとか色であるとか、新しい魅力を加えるものとして、こういう手法を考えながらやっています。

●古民家再生からまちづくりへ

我々が最近一番関わっているのは、伝建地区の中の生活道路のところ。古いものがまだまだ残っています。問題なのは、そこが空家になっていたり、ほったらかしになっていたりしていることです。その結果、居住人口が減ってしまっていて、なるとか、居住人口を戻そうということで、知人とNPOを立ち上げました。町家トラストということで、町

ーズに答えられれば良いということですよ。

植村●分かりやすく言えば、みな同じになるのはかえって気持ちが悪いです。多様性があるって、いろんなレベルがあって、お金持ちも一般の人もいる。だから、いろいろな方法論があっというと思っています。——いろいろな新しいものや外国のモチーフを使われたりしていますが、そういうアイデアや新しいデザインはどのような形でイメージとして湧いてくるのでしょうか。

植村●基本的には、クライアントと相談するわけではなくて、我々の好みがあって、必死にやった結果だと思えます。何故、あんなものを入れていくかと言うと、時間が経過した民家の魅力をどう掘り起こしていくかというのが、我々の務めでもあるし、より良く活かしていくこともそうです。そのとき、できるだけ本物のものを使いたいということと、これだけ情報化していると、世界中の情報が入ってきて良いんじゃないか。そういう中で、本物を組み合わせていくことによって、新しい

魅力的なものが出てくる。

ただし、それが10年、20年経ったときに、飽きるようなものでは駄目。だから、材質とか色とかいうのがかなり大事になってくる。それを、別に和風だとか洋風だとかじゃなくて、本物の材質とか色とかを合わせていくことによって、新しい魅力的な空間に変わっていくたら、今までの民家に無いもののような気がする。それが、我々の言っている本物のモダンだろうと。20年経っても、魅力的な空間になるようなものを作りたいと思っています。ですから、あまり日本とかにこだわらずにやっています。ただそれも、日本のものをきちっと分かった上でやっています。

●古民家再生工房の仲間

——随分、革新的なこともやられているわけですが、最初の頃は、体質的に合わないとか、いろいろ言われたこともあるんじゃないかと思えます。植村●自分の信念みたいなものを持ってやっていたし、仲間もいた。相対的な議論を積み重ねていたし、これ



藍染めの作業納屋を設計事務所へ再生



空き家の旧家をレストランに再生

が一つの方法論として絶対いけると
いうことの確信を持ってやってきた
ということ。結果を残してきた
し、積み重ねてきた。ですけど、当
初はやっぱり言われましたね。

——仲間とは、古民家再生工房の方
のことですね。そういう同じような関心
や志を持った人が、20年前から何人も
いらしたんですか。

榎村●自然発生的なんですけど、地
方の景観の問題とかを一生懸命考え
ていて、それに意欲的な仲間もいて、
民家をベースにしてやっていくうち
に、テレビ局に頼まれて、古民家の
再生をしたことがあるんです。17、
8年前かな。それをきっかけに、残
したいけど壊さざるを得ない家があ
まりにも多いことがわかってきたん
ですよ。

ですから、数をやることと、世間
に対して壊さずにやればこうなりま
すよということのアピールをするた
めに6人で行った。決して仲良し集
団でなくて、けんかばかりやってい
ますし、建てたものをみんなで見に
行って、批評し合って、それを繰り
返してやっていますから、かなり共

通したノウハウができる。その積み
重ねが良かったですね。そう意味で
は良い仲間がいたと思っています。

●職人の育成

——質を上げることは大事だと思う
んですけど、デザインの質もありますが、
それを実際にやってくれる職人さん
の質も上がらないと、なかなかいい
ものにならないですよ。

榎村●よく職人を育てると言われ
けど、私は、それ程職人を舐めちゃ
いけないと思います。我々が育てら
れるもんじゃやない。だから、逆に
我々がすべきことは、職人に対して、
プライドのもてる仕事を、我々が設
計して提供すること、仕事を絶やさ
ないようにすること、それが我々の
務めかなと思っています。

西村●榎村さんは、旅館の改修を20
年間ぐらいずっとやってこられて、
未だに改修されている所がある。こ
のように継続されているというのは、
今までの建築の仕組みでは、ほと
んど考えられていないことでは
ね。その意味では、新しい形での民
家の再生の可能性があるんじゃない

かと思うんです。つまり、通常は工
期があつて、いつまでにやらなきゃ
ならないとなるわけです。それが延
びると、すぐに借金の利子に反映し
てしまうので、至上命令になって、
そこから逆算して、いろいろな工事
が決まってくる。

たしかに大都市で大きなビルを建
てるときはそうかもしれないけど、
自分たちが家を持っていて、少し
づつ改善したり改築したりするとき
は、全然違うやり方があるかもしれ
ないということ。それは、大規
模な改装と全然違う発想の中で、仕
事ができるということなんです。

また、単価が安いものは、大都会
ではできないけど、地方だとできる
ことがあるんじゃないか。それもま
た、新しいビジネスやビジネスモデ
ルを作る大きな流れだと思ってい
ます。今までは、大都市に情報が集ま
って、大都市の情報が常に模範を示
して、それが地方に下りていったと
いう時代だけでも、そうではない全
然違う流れになっている。そういう
ところから、もっと発想を変えて、
新しいお店や住まいの作り方、町家

の再生やまちづくりのあり方を考え
て、そこに本当に新しい21世紀型、
ポトムアップ型のまちづくりの大
きな議論が生まれてくるんじゃない
か。

そのことをまさに榎村さんは、一
つ一つの建物の中から見出してちや
んと伝えてくれていると思います。
一つ一つのプロジェクトは単体だけ
ど、持っている思想の意味では、大
都市からのトップダウンとは全く違
う方法論ですよ。そういうことが
やれるんだということを示して
いて、それが非常に大事だと思
うんです。

それは建築に携っていない方
も、このような話を聴いて、新たな
発想を汲み取れば、それぞれの地域
から、新しい今までにないまちづく
りの住まいの論理を本当に創り上げ
ることができるんだということにな
ると思うんですよ。そういうこと
を、垣間見させてくださったとい
うことに感謝したいと思います。あり
がとうございました。

*本記事は「西村幸夫町並み塾」(同実行
委員会主催)の協力による。